おかのうえ D.I.O TABLE

できるだけ　いろんな人と　おしゃべり

レポート　vol.05

開催概要

日時：　令和８年６月７日（日）10:00～12:30

場所：　平山台健康・市民支援センター １階エントランス

主催：　日野市

協力：　studio - L







第５回「おかのうえ D.I.O TABLE」が開催され、14 名の市民のみなさんが参加されました。第５回では改めて本事業の趣旨や、昨年度のふりかえり、今年度の流れを説明し、日野市からはワークショップで出た意見をどのように方針に反映させていくかプロジェクトチームを編成して検討を進めることが共有されました。グループワークではセンターの方向性案で気になる点や大切な視点、今年度の取り組み、視察先について、グループごとに話し合いました。このレポートでは当日の様子をお伝えします。

プログラム

- はじめに
- 本事業について
- 話し合いの前のエクササイズ
- 今後にむけて
- ワーク①「今年度の取り組みについて考えよう」
- ワーク②「視察先について考えよう」
- 共有
- おわりに

本事業について

今年度の流れ

昨年度も含めたこの２ヵ年でセンターの活用の基本方針を策定します。今年度は視察や取り組みのお試しも実施しながら、以下の内容について検証と検討を繰り返し、方針案に反映させていきます。

- 求められる５つの要素の再検討
- センターに求められる機能・役割の検討
- その機能をどう運営するか
- 自分たちはどう関わるか
- 描いた将来像を実現できるか

今年度のスケジュール

項目 / 月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
ワークショップの実施		●	●		●		●		●		●
視察				●							
お試しの実施						●					
方針案の策定										●	

話し合いの前のエクササイズ

グループワークの前に、話し合いのエクササイズを２種類実施しました。

①「誕生月でグループになる！」

言葉以外のコミュニケーションで対話し、思いがけない人とグループになるなど改めてお互いの顔を知る機会となりました。



②「Yes, and,,,」

相手の意見やアイデアを肯定（Yes）し、新しい提案を重ねながら会話を発展させていく過程を体験しました。



ワーク①「今年度の取り組みについて考えよう」

平山地域の理想の将来像を実現するために、今年度は、方向性案に整理したセンターに求められる 5 つの要素の再検討や、求める機能・役割などの具体的な検討、それらの機能をどう運営するか、自分たちの関わり方などを検証していく必要があります。ワーク①では、方向性案を改めて見直しながら気になる点や大切な視点を話し合い、今年度の取り組みについても意見を出し合いました。以下、各グループで出た意見をまとめたものを紹介します。

① 方向性案で気になる点や大切な視点について

求められる 5 つの要素

集まる	＜地域の拠点づくり＞ ・地域の拠点となることが大事。人が集まって話をしたり、多目的に利用できる拠点にしたい。 ＜人が集まる仕組みづくり＞ ・5 つの要素の中から「集まる」目的が、生活の一部につながる仕組みになっているといい。商店街などがない平山地域で、徒歩圏内にセンターがあることは大事な役割を担うと感じる。
支え合う・備える	＜日常から支え合う・備える＞ ・「支え合う・備える」ために日常的にどんなことに取り組むかが重要。 ＜地域資源を活かす＞ ・避難所としての機能や防災の観点から、水をどのように確保するか考える必要がある。
遊ぶ・愉しむ	＜遊ぶ・愉しむ＝元気の素の重要性＞ ・高齢化して移動するのが難しくなっていくうちに、「これはなくても大丈夫」とさまざまなことを消去して「最低限」のことだけで暮らしているから「困っていない」状況だけれど、「その暮らしは豊かか？」「元気に暮らせていると言えるか？」つまり、「楽しさ」や「面白さ」がなくても生活には困らないが、遊びや楽しみを諦めていないか。遊びや楽しみは「元気の素」。この場所を、地域のみんなの「元気の素をつくる」場にしたい。
（愉しみを）ひろめる	＜対話を重ねる重要性＞ ・新しい取り組みを考える際には理解や協力が必要であり、安全面への配慮ができているか地域の人が心配する。時にはユーモアを交えて対話を続けていけば最終的には仲間になってくれる。 ＜エリア全体で考える＞ ・駅前周辺は昔はお店もあり元気だったが、今は元気がなく、公園は誰も遊んでいない。どこか１ヶ所だけに魅力があるということではなく、センターへ行く道が楽しい、センターの入口になりそうな平山城址公園の駅周辺でも面白いことがある、などエリア全体で考えていく必要がある。
学ぶ・育てる	・特になし

求められる大切な視点

＜地域を面として捉える＞

・センターの建物ができて 50 年程度経つが、じゃあ次どうするのか？という視点ではなく、この地域が 100 年栄えるためにどうしたらいいのかを考えながら色々なことに取り組むと継続性が生まれるのではないか。そのために、活動している人自身が愉しく、交流できることが大事なポイントになる。また、1～3 丁目だけではなく、平山地域全体として 4～6 丁目の住民も関われる視点が一番大事。

センターに求められる空間的要素と運営方法

＜多機能の規模感＞

・カフェやキッチンなどセンターに必要な機能のアイデアについて、すべてに取り組もうとするとスペースや人手が足りない。それぞれがどれくらいの規模で実施するかを考えることが大事。

＜本当に必要なことは何か？＞

・ワークショップに参加していない人が、地域に対してどう思っているのか知りたい。誰がどんな風に困っていて、何をすればその人たちが幸せになるのか、本当に必要なことが具体的に見えていない。

＜自分たちで自治できる運営方法＞

・取り組みアイデアについて、自分たちの自治で運営できる方法を考えることが重要。既存の活動と１０～３０年後の未来の活動のバランスを考える必要がある。現在センターの利用者が多いのはなぜか、調べられるといい。

② 今年度の取り組みについて

グループ１

＜地域でまかなう＞ ※「集まる」の要素の検証

・野菜をつくる人、売る人の両方が地域にはいる。両者をつなぐ取り組みをしたい。畑で多世代交流し、とれた野菜を売って地産地消の取り組みをしたい。

＜おかのうえドッグラン＞ ※「遊ぶ・愉しむ」「支え合う・備える」の要素の検証

・今までやったことはないがやりたい人がいそう。犬の避難訓練にもなる。





グループ２

＜You は何しに平山へ？突撃茶屋＞ ※「本当に必要なものは何か？」の調査

・ワークショップに参加していない人など、平山地域全体から、意見を聞きたい。
・そのために駅前の人通りがあるところで、お茶を用意して「涼みませんか？」と誘い、地域のことについてどう思っているか、アンケートを取る。
・アンケートは答えやすいようにパネルを用いて投票方式にする。





グループ３

＜ハレの日をみんなでやってみる＞ ※「集まる」「遊ぶ・愉しむ」の要素の検証

・センターや地域ですでに活動している団体同士の横のつながりがあまりない。お試しイベントのような形で、それぞれの活動について発表したり、ブースを設けて活動の見学会ができるような、一堂に会する機会をつくりたい。

＜センターの活動者同士や近隣住民が知り合う日常の機会づくり＞

※「集まる」「（愉しみを）ひろめる」の要素の検証

・家庭菜園をしている人が地域に多くいるが、とれすぎた野菜をマルシェや焚き火会で販売することで、野菜を目当てにセンターに来る人がいるかもしれないし、別の用事でセンターに来た人に声をかけることもできる。センターの取り組みを知ってもらう機会や、仲間が増えるきっかけとして取り組んでみたい。





ワーク②「視察先について考えよう」

今年度は取り組みのお試しだけでなく、視察にも行き、そこで得た学びや気づきを踏まえてセンターの活用の基本方針の検討を進めます。ワーク②では、昨年度のワークショップで出た事例やさまざまな視点で学びのポイントのある事例（日野市から日帰りで行ける範囲）を 6 つ紹介し、視察先で「学びたいこと」や「知りたいこと」について意見を出し合いました。視察先については、先方の受け入れ体制やスケジュールを踏まえて検討を進めていきます。以下、それぞれの視察先候補の紹介と各テーブルで出た気になるポイントを紹介します。





① 萩山公園（東京都東村山市）

園内にできた新施設「はぎま」は公園の管理事務所やアンテナショップだけでなく、市民の小さな活動拠点となっている。公園の段階的な整備や地元企業が公園の管理に参画している点が特徴。

＜気になるポイント！＞
- 運営管理の方法、地域での位置づけなどが気になる。
- 施設は公園だけでなく、色々なところとつながりがあり、エリア全体として考える点に少し類似性がある。



©相羽建設

② 町田山崎団地（東京都町田市）

自治会や行政、地域住民が協力しながら防災体験イベント「団地 de キャンプ」を継続開催し、若者の移住や地域交流にもつながっている。

＜気になるポイント！＞
- お泊りイベントの際に、団地に住む高齢者などが実際に寝泊まりして訓練したのか聞いてみたい。
- 年に 1 回イベントを実施するまでのプロセスや、当日の運営方法などが気になる。



©SUUMO、写真撮影/片山貴博

③ トライアルパーク蒲原（静岡県清水区蒲原）

道の駅整備事業として、民間事業者と一緒に段階的に整備を進めている。施設運営を通じて市民や企業が使い方を試しながら、実験と検証を重ねて新しい道の駅のあり方を模索し、拠点づくりを行っている。

＜気になるポイント！＞
- 施設が未完成のままやってみたお試しの方法を聞いてみたい。
- 今後、取り組みなどを取捨選択していく際に、どう段階的に試しているのか、どう合意形成しているのかなど聞いて勉強したい。



©トライアルパーク蒲原

④ だがしやほっぷ（東京都府中市）

空き店舗を改修し、駄菓子屋さんを運営している。駄菓子販売に加え、子どもたちの居場所や地域交流拠点の役割も担う。子ども店長体験やワークショップなども実施している。

＜気になるポイント！＞
- どこが運営しているのか聞いてみたい。
- 子ども向けの活動なので、子どもをテーマにしているメンバーで遊びに行けるといい。



©だがしやほっぷ

⑤ YADOKARI Tinyhouse Showroom

（神奈川県横浜市保土ヶ谷区）

さまざまな種類のタイニーハウスを展示場で実際に見ることができ、他の地域でどういった活用がされているのか知ることができる。

＜気になるポイント！＞
- タイニーハウスの使い方や、ハレの日に使用している時とそうでない時はどうしておくといいかなど、注意事項や運営方法を知りたい。



©YADOKARI,net

⑥ 霜里学校（埼玉県小川町）

地域住民を中心に立ち上げた NPO 法人が廃校を管理しながら、農業に特化した体験学習や地域交流を推進している。移住支援や観光案内、企業向けの農業体験研修などを通じて地域活性化にも取り組んでいる。

＜気になるポイント！＞
- 運営管理の方法が気になる。NPO 法人を立ち上げてどのように運営しているのか。運営の継続性を考えたときに、NPO 法人なのか民間事業者に頼るのかという部分も含めて聞いてみたい。



©NPO 法人霧里学校

各グループの発表から

それぞれのグループから一過性ではなく継続的な意見が多く出ていました。センターの位置づけについては、「愉しみ」や「面白いこと」など文化的な活動をつくる場となることで、地域住民同士の関係性づくりや安心・安全なまちづくりにつながっていくと思います。また、ワークショップに参加していないセンター利用者や住民意見を聞きたい、住民が運営に関わる可能性や方法について今後検討したい、といった意見も大切な視点だと思います。今回出た意見なども踏まえて、今後のスケジュールを検討していきます。



studio-L
洪さん